

平成25年度（第40回）
岡山県老人福祉施設職員研究発表会
第一分科会研究発表への助言

期日：平成26年2月21日（金）
場所：岡山コンベンションセンター

元川崎医療短期大学教授
内田富美江

演題1：トロミの硬さの統一に向けて

○研究の目的が明確、介護の根拠を裏付ける**粘度計を用いた測定、日本摂食・リハ学会分類に基づき研究を進め、信頼性あり。**

○トロミの粘性によっては誤嚥を招く可能性もある。安全な経口摂取には利用者個々の嚥下状態に即したトロミにすべきであると考え（研究目的）、介護職がなすべきことを検討、段階を追って検証し、マニュアルを作成し介護の標準化を目指した点は素晴らしい。

●ただ、利用者個々の**嚥下機能の評価**がなされていないため「利用者の嚥下状態に合ったトロミの提供」という研究目的が達成されなかった。

●利用者個々の嚥下力とトロミの硬さに着目、**利用者目線に立った介護の大切さ**を教えてくれた研究。ぜひ継続研究し再度発表してほしい。

演題2「食材費と在庫管理」

- 「在庫管理を徹底すれば浮いたお金で利用者に美味しい物を食べていただくことができる」(仮説)。
- 在庫管理を徹底して(5万円以下)も赤字が続く⇒その原因は別な所にあったため**仮説は立証されなかった**(赤字の原因:野菜高騰、喫食者減、高単価食材使用、物流事情、物価上昇の影響)

●では、どうすればよいのか。実践結果の分析、考察をもう少し踏み込み今後の課題につなげると締まった研究になる。

●美味しい食事を提供し続けていくためには、栄養士と介護職が密に連携し、コスト管理面を含めた話し合いが重要なことを教えてくれた研究である。

●今後特に厳しい経済状況の中でサービスを展開することになるので、コスト面に着目した研究は重要である。

演題3「今を豊かに生きるため一回想法から学んだこと」

○回想法の効果は既に検証されているが、非薬物療法の一つとして介護職も習熟し実績を積み上げたいテーマである。

○回想法の**進め方の基本に沿って丁寧に実践し効果をあげた。**

聴き手が利用者の語りを傾聴することで利用者の承認欲求を充足させることがポイント。対人援助技法の意識的実践で成果をあげた。郷土資料館見学、懐古を助ける仕掛けも充実。

●主観的なもの⇒客観的評価へと繋ぎフィードバックしていくことが大切。BPSDの状態別の回想法の効果など、まだまだ掘り下げていく課題が多い。継続研究し、どの点に最も効果があるのか積み上げてほしい。

●戦争など辛い体験はネガティブ感情を惹起するのでテーマにしない。

* 回想法の効用

認知症の人は、昨日のことは忘れても昔のよい思い出は覚えている。懐かしい記憶を掘り起こし、高齢者が輝いていた過去を再認識し、相手に認めて貰うことで自尊感情が高まり、情緒が安定し、脳全体が活性化する。そして①他者への関心が増す、②意欲の向上、③BPSDの減少、④表情・非言語的表現が豊かになる⑤認知症の進行を遅らせる、などである。

演題4 「地域交流：閉校利用のサービス展開～いまふたたび時間を刻む」

- 「閉校」利用が利用者、家族、地域住民にもたらす影響を検証した。
- 地域で生活する中高年者にとって「幼き頃の思い出が詰まった学び舎」は、ある意味で心の拠り所の一つ。ただ、その“心の拠り所”の延長線上に「高齢者介護施設」が位置づけられるかどうかは、未知数。
- 施設と地域住民との心理的距離は施設職員の在り様にかかっている。
「開かれた施設」とは何か？住民サイドから考える「開かれた施設」のイメージと施設サイドが考える「開かれた施設」は格差あり。
- 住民サイドからは“顔が見えない”のでは？ **住民の立場で考えることが大切なのではないか。今一度、生活を共にする町内会の一員として、胸襟を開いて語り合い、時間と手間をかけ心の距離を縮める必要があるのでは。**
- 研究目的、実践内容、課題等しっかり分析・考察できている。地域交流は今後、どの施設も取り組むべき課題であり、参考になる研究である。

演題5 『おむつを外して当たり前の生活を取り戻す』

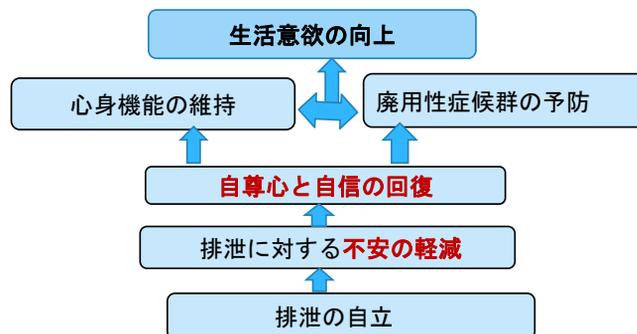
当たり前の生活＝オムツをしない生活！（自立支援介護）

○オムツは最終手段だと常時意識して介護することが大切

☞人の尊厳を台無しにし、生きる意欲を無くすため

では、オムツを外すとどうなるのか？

排泄の自立の意義



◎竹内孝仁理論の実証研究として特に下記の点が素晴らしい。

○組織的な取り組み（おむつゼロ実行委員会、多職種で検討、方向性を出す）。

○職員の意識を変える研修を毎月実施：実践の根拠：知識と技術を学ぶ

○職員の理解と納得の上に実施：1年後に軌道に乗せる

○事例からわかる事（D様）

・水分摂取量2000cc ⇨喘鳴、流涎止み、覚醒レベル向上

・ケアプラン変更内容 ⇨歌が歌える、座位姿勢保持、トイレで排泄、常食へ（驚き！）、2日に1回トイレ排便、表情豊かに！

●自立支援の典型例⇒これこそ本当の介護の姿

●オムツ外しの取り組みがもたらす利用者への効果は、“生き帰ったような感動的なもの”

●中国地方でも各地で実践され始めており、オムツ外しが排泄介護の主流になる時代が近づいている。各施設の排泄ケアの在り方に大いに刺激になった研究である。

○オムツの7つの弊害

①QOLの低下②ADLの低下③生きる意欲の低下④介護量の増大⑤職員の意欲低下⑥費用の増大⑦ゴミの増大

演題6 『集団で音楽療法：利用者の好きな音楽を使って楽しく活動』

○音楽療法士による専門的指導で集団音楽療法を実施。

計画的に実施し、協調性、呼吸のコントロール、集中力向上、自発的言動など成果をあげた。

●音楽療法に携わるスタッフには、主観的⇨客観的⇨評価⇨プランという流れの考え方を習熟することが大切。また、どのようなデータを収集し記録していくのか、何を研究するのか細分化していくと更に質の高い研究になる。

●治療計画という表現が適切か疑問（筒井氏）。

●音楽療法の評価は？「笑顔・食欲・元気」などで把握する（筒井氏）

●音楽療法に関しては、老協会長筒井恵子氏がプロフェッショナルなので指導を受け実践してほしい。

○身体機能や認知機能の低下により、事故やトラブルが増加したとされているが、しっかり検証・分析した方がよい。

○音楽の効果

認知症の人はストレス、不安、緊張過多であり、歌う、楽器を使うことによりBPSD減少、ADL改善、心身リラックス、ストレス解消、笑顔、発語の増加する等の効果がある。

演題7 『独語の向こう側』

○独語の原因（医師）⇨前頭側頭葉変性症、レビー小体型認知症の混合、（レビー小体型認知症：幻視出現⇨「（そこにいる）誰かと話している」）

⇨『独語は問題』⇨何とかしなければ（問題意識）

○生活ケアの見直し⇨A氏の言動の背景を知り心に寄り添う努力

○不快感を減らし快適時間を多くする個別ケア⇨姿勢改善、入浴・体操時間確保、毎日レク、食べたいもの食べる、足浴

・・・つまり、**個別対応を充実することが幻視、幻覚の減少につながった**

そして、介護職にA氏の受け止め方に変化が生まれてくる

独語をなくしたい⇨独語あってもA氏らしい生活を応援⇨「あるがままのA氏を受け入れる」ことができるようになる（独語があってもいいじゃない）

●とても重要な気づきがあった

医療の立場は、「今よりもよくなることを求める」

福祉の立場は「条件をつけず、あるがままを受け入れる母性的な立場」

◎**生活支援の中で、利用者に教えられCWの成長があった点が最も大きな成果。**

演題8 『口腔ケアのよさってなあと』

○口腔ケア

毎日の生活における基本的ケアの一つ。歯がない、胃瘻、寝たきりの人にも不可欠。

○口腔内の不潔

虫歯、歯周の腫れ、痛み、口臭、唾液量減少、誤嚥性肺炎、食事摂取困難、嚥下困難など発熱を伴う疾患のリスク大、死に至ることあり。

●毎日の基本ケアを確実に行うことが利用者サービスの第一歩

歯科衛生士等口腔ケア、口腔リハビリ指導者は多々いる。口腔ケアは手を抜いてはいけないケアの一つである。365日必ず行っていただきたい。

演題9 『タブレット端末の活用法』

○電子化のメリットとデメリットについて教えられた研究だった。

○iPadの活用している施設と使用していない施設がある。

○効率性、業務の省略化、情報の入手、コミュニケーションツールとしては優れている。

○ただ、落下による故障続出の話や盗難に遭った話は多々あり。

●この場合、介護記録等利用者情報が満載されている場合には、守秘義務の観点から手軽に持ち運びができることは必ずしもメリットばかりではない。

●倫理上の課題に十分対応した使用法を各施設で検討されたい。

演題10 『食事姿勢は大丈夫：食事姿勢改善から見てきたこと』

○食事と姿勢との関連に着目、迷わずケアの在り方を検討。

疑問をそのままにせず、これでいいのかと検証していくのが実践研究の大切な姿勢。

・食べこぼし⇨大人でも食事用エプロンを着用している⇨何かおかしいぞ（取り組むと・・・姿勢改善（視野の広がり）、常食へ変更⇨食べる意欲回復⇨自力摂取へ⇨食べこぼし減少⇨誤嚥が減少⇨外食も可能に（意図したことと別な所に問題があったことに気づき、利用者の食事摂取時の不自由さを改善できた）

●小さな気づきが大きな成果につながった

訴えられない（訴えの少ない）利用者の視点に立って何か問題がないか意識していないと見過ごしてしまう内容。

利用者本位の個別ケアを実施しようとする介護職員の力量とそれを支える多職種連携がなければ実現しなかった成果であり素晴らしい。

演題11 個別外出の充実への取り組み

○外出の意義

・周囲への関心、注意が向く（心理的活性化）、普段の生活と異なる社会の一員としての役割、食事摂取量が増える（食生活の変化）、意欲向上と心理的安定、「またどこか行きたい」と楽しみができる（生きる上で大切なこと）

○利用者・家族の希望を入れ、個々に合わせた外出を企画・実施。

●付添う職員の確保、外出先の事前調査等繁雑で手間がかかるが、家族と過ごす濃厚な時間を確保することに尽力する介護の姿勢が素晴らしい（利用者本位、個別ケア）。

なぜなら、要介護高齢者にとって、家族と過ごす時間は年々減少し稀有な機会であるので。

●外出の効果測定、検証方法はあるか？

なければ、指標づくりの必要性がある。その効用を家族の視点からも研究してほしい。

全体講評

①小さな問題から根本的な介護のあり方まで、魅力的な実践が多かった。問題意識が明確な研究ほど成果が上がっていた。

②実践研究にも理論と根拠が求められる。実践する前に参考文献をしっかりと読んで取り組んだ研究は、問題意識・着眼点が明確で、結果の分析・考察もできていた。

③研究を始める前に計画を立て実践するのが望ましい。

④実践を分析、考察する際は、同様の研究をしている文献を参照しながら考察すると深い考察ができるようになる。

⑤現場で実践研究をする第一義的な目的は、よりよい介護へと努力を積み重ねることで、利用者利益に貢献することである。

また、専門職業人として、どのような介護を行い成果を上げているか、わが施設の専門分野を社会に公表し、介護への信頼度をあげることも重要なことである。

資質向上をめざして継続研究をしてほしい。